

コルカタのハルモニウム産業に関する民族音楽学的研究 —ハルモニウム製作に見るコルカタの都市性—

岡田 恵美

東京芸術大学音楽学部 教育研究助手

緒 言

1991年の経済自由化政策以降、インドは急激な経済成長を遂げている。新興富裕層や中間層の台頭に伴う内需拡大や、外資系企業の参入、膨大なNRI(在外インド人)の輩出といった急速な社会・経済的变化は、インドの楽器産業にも少なからず影響を及ぼしている。

インドでは、古典音楽や宗教歌謡の伴奏楽器としてハルモニウム(図1)と呼ばれる小型の鍵盤楽器が浸透している。現在、国内のハルモニウム産業は、輸出の増加が顕著な成長産業である。だが一方で、インド東部コルカタのその産業は、高度な技術力を維持しているにも拘らず、近年は大量生産される他都市の製品に圧倒されて停滞傾向にある。90年代以降の社会・経済的変動の中で、各都市の楽器産業は、加速化する変化にいかに対応してゆくかという問題に直面し、変化への適応性の有無が、都市間における産業規模の格差を助長している。

本研究では、コルカタのハルモニウム産業に焦点化し、ハルモニウムの受容史やその楽器構造・機能を考察した上で、コルカタの楽器産業の特質を抽出することを目的とする。

1. コルカタにおけるハルモニウム受容史

ハルモニウムは、手鍵盤とストップ(音栓)を備え、鞆からの気流によって金属製リードが振動して発音する自由簧の気鳴楽器である。1842年にフランスで特許・商標登録されて以降、その製作技術は欧米諸国のみならず、アジア諸国にも波及した。

英国統治下のコルカタでは、1886年にドウワルキン楽器工房の創設者ダルカナト・ゴシュ(1847-1928)が、輸入品を改良した初の国産ハルモニウムを発表した。当時、西洋楽器の輸入販売や修理に従事していたダルカナトは、ハルモニウムの鞆を内蔵型から外付型の手漕ぎ式へと変え、床に置いて胡座の体勢で演奏可能な小型品を製作する。

当時のコルカタは、芸術や学問の都として東西文化の融合が図られ、アジア人初のノーベル文学賞を受賞したロビンドロナト・タクル(1861-1941)を筆頭に、国際的にも著名な文化人を輩出してきた。ダルカナトはコルカタの知識人や音楽家にその改良楽器を寄贈し、音楽学者S.M.タクル(1840-1914)や前述のロビンドロナト等多数が、ダルカナトの元に返信の書簡を寄せている。そ



図1 コルカタ製ハルモニウム

ここでは小型ながらも気鳴楽器に特有の力強い音量が賞賛され、国産ハルモニウムは地元の文化人の支持を得て、古典声楽や宗教歌謡の伴奏楽器として採用されていた。

20世紀初頭はインドのルネサンス期とも称され、音楽界においても重要な転換期であった。19世紀後半からのナショナル・アイデンティティの高揚を背景に、V・D・パルスカル(1872-1931)やV・N・バートカンデー(1860-1936)といった国内の音楽学者が頭角を現し、音楽理論の体系化や音楽教育の改革、そして音楽会議の実施が活発化し始めた。こうした音楽的環境の変化はハルモニウムの浸透にも少なからず関与している。例えば、音楽教育機関の設立は音楽学習者を拡大させ、声楽の授業ではそれまでの伴奏楽器であった擦弦楽器のサーランギーの代替として、ハルモニウムが定着していったのである。

国産ハルモニウムが浸透する一方で、非難や論争も勃発するようになった。その矛先は、それが欧州由来の「外来楽器」であることよりも、平均律に調律された「鍵盤楽器」であるが故に、インド音楽の要である微分音や、装飾技法が表現できない点に向けられた。

北インドでは、1939年に国営ラジオ放送 All India Radio (以下、AIR) が同放送でのハルモニウムの使用を全面的に禁止する事態に発展した。決断を下した総ディレクターのライオネル・フィールデンは、英BBC

放送からAIRに派遣された英国人で、同時期にAIRのディレクターであった英作曲家のジョン・フォールズ(1880-1939)による記事、それは微分音をもつインド音楽には平均律に調律されたハルモニウムは適さないという内容であったが、その考えに感化され、翌1939年の局内会議において同放送局でのハルモニウムの禁止を決定した。

ラジオ放送上のハルモニウムの不遇の時代は30年以上も続いたが、1971年のAIR主催のハルモニウム討論会では、番組上のハルモニウムの使用禁止に対する再検討が議題として掲げられ、各地から集結した音楽家や音楽学者等が、使用推進派と否定派の立場から討論を交わした。その後、AIRは遂に使用禁止を部分的に撤回する決断を示し、規制緩和の方向へと動いた。

ハルモニウムは西洋由来の楽器であると同時に、鍵盤楽器という、言わば二重苦を背負った楽器である。だがコルカタにおけるその受容史を概観すると、逆境の中にもそこには創造性を発揮する職人や演奏家の存在があり、地元の文化人がその産業を支えてきた。一方でハルモニウム論争を代表する諸々の事象においては、西洋人の関与も無視できない。即ち、コルカタという英国植民地の辺境で芽吹き、東西文化の混沌とナショナリズムの気運が高揚する中で、ハルモニウムはまさにそうした時代の潮流を象徴する楽器と言っても過言ではないだろう。

2. コルカタ製ハルモニウムの特徴

コルカタでハルモニウム産業が興隆すると、産業は他都市にも波及し、インド最大の商業都市ムンバイでは1935年頃、デリーでは1947年のインド独立前後から本格的な生産が始まった。今日でもその産業の主要都市は、上記の3都市である(図2)。

ムンバイを含むマハーラーシュトラ地域では、19世紀後半から20世紀初頭にかけて流行したマラーティー語の舞台歌劇で盛んに輸入ハルモニウムが使用され、以後ムンバイで興隆する楽器製作にも、歌劇に適した音量や発音といった機能面において影響を及ぼしている。

またデリーの産業は、1947年の印パ分離独立に伴ってラホールやパンジャブ地方から移住してきたシク教徒によって担われ、近年は市内近郊のUP州ノイダ等に量産可能な工場を整備し、国外輸出率も非常に高い。またメディアを駆使したインターネット販売や欧米での販売店の設置等、NRIに向けた国外輸出の流通販路を急速に拡大している。インドのハルモニウム産業は、生産者

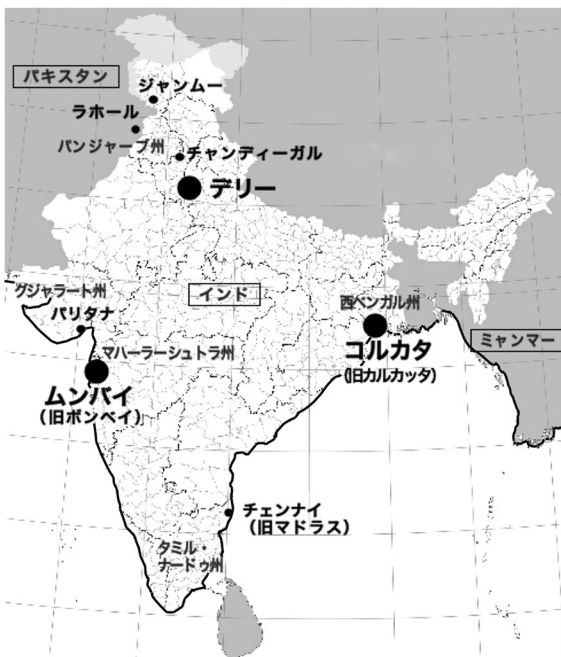


図2 ハルモニウム産業関連都市



図3 コルカタ製携帯型ハルモニウム 左図は収納時、中央・右図は演奏時

である楽器工房が流通・販売を直接手掛けるため、こうした流通・販売面での変化が、変化の時流に乗れないコルカタの一部の楽器工房の存続を揺るがしていることは事実である。

だが、都市単位での産業格差が顕著な中でも、「コルカタ製＝高品質」という認識はデリーやムンバイにおいても顕在であり、ここでは具体的に、コルカタ製の主な構造や機能を幾つか列挙し、他都市の製品との相違点を考察する。

送風機構：コルカタ製で主流の携帯型(図3)は、収納時は取手と鍵が付いた箱状であるが、演奏時には上半分

の箱を外して、楽器本体を上げることによって、背後に付帯した鞆の開閉が可能となる。

本体の外箱は、デリー製は安価なパイン材の使用が主流であるが、コルカタでは、MP州やミャンマー産のチーク材を確保し、材質に拘泥した製作が続けられている。

上蓋部分の装飾細工は各工房のロゴマークの意味をもち、木材加工専門の部品工房が請負い、鞆についても鞆専門の部品工房で製作される。

送風機能(図4)に関しては、鞆を閉じると鞆内部の空気が圧縮されて一気に本体に流れ込み、空気袋には圧縮された空気が充満する。ストップを引出した場合、ストップ盤の穴を留めていた栓が連動し、空気が空気袋からストップ盤の穴を通してリード盤へと流れ込む。ハルモニウムは気流の圧力が各部分に直接かかるために、外箱の硬度やリード盤及びストップ盤の密閉度が不可欠であり、そこに職人の精巧な技術が要求される。

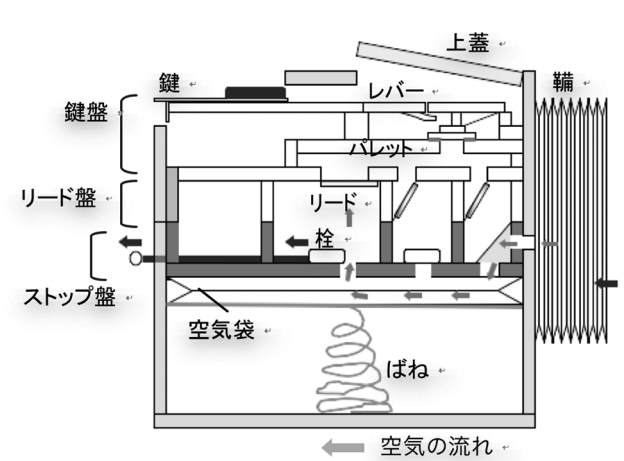


図4 断面図からみる送風の仕組み

鍵盤構造：コルカタ製が高品質として名を馳せる理由は、その精密な鍵盤構造にあり、移調鍵盤がその特徴である。それはリード盤や鍵盤のレバー部分を固定したまま、鍵の部分だけを左右に平行移動させることによって移調可能となる仕掛けである。

次に、鍵が動く仕組みについて考察すると、現在、デリー製やムンバイ製では、金属製のスプリングを直接鍵



図5 レバー型鍵盤の仕組み(左・中央は鍵とレバー、右はレバーの断面図)

に当てて動かす方法が一般的であるが、コルカタ製の主流は木製レバーと鍵を噛ませたレバー型鍵盤(図5)である。レバー型鍵盤は、鍵とレバー双方の切り込みが噛み合う仕掛けであり、鍵を下に押しとレバーが引上げられ、同時に空気穴を封じていたパレットが浮き上がって発音する。この仕組みが移調鍵盤機能を可能にさせ、言い換えれば、移調鍵盤機能付ハルモニウムがコルカタ以外では製作されない理由には、こうした鍵盤構造による事情がある。

楽器の価格設定も、こうした鍵盤構造や付属機能によって異なり、2010年時点では、移調鍵盤機能付ハルモニウムはRs.20,000(約40,000円)程で、デリー製ハルモニウム(Rs.4,000前後)と比較すると非常に高価である。

リード:リード(図6)に関しては、当初、コルカタではフランスやドイツからの輸入リードを使用していたが、1947年の独立を契機とした輸入関税の引上げによって輸入品が高騰し、以後はパリタナ製リードに依存することになった。

国産リードの製造は、青銅加工が盛んであった北西部グジャラート州のパリタナという小さな街で1905年に始まった。その経緯は、1901年にパリタナに隣接するバーウナガル藩国の藩王バーウスィンジー2世(1875-1919)が、所有していたドイツ製ハルモニウムの修理のために、パリタナの街から2人の鍛冶屋を召喚したことに因る。2010年時点、パリタナには7つのリード製造工房があり、何れも2人の鍛冶職人の血筋を引いた子孫がリード産業を担っている。リード工房では、鑄造、鍛金、研磨、取付、調律の5種の作業工程が、約30名の職人によって手作業で進められる。一工房での月間生産量は平均150セットであり、コルカタの工房に出荷されたパリタナ製リードは、最終的に、Aの音叉(A=440Hz)を用いて12平均律で調律される。

3. コルカタのハルモニウム産業の特質

コルカタの産業の体制を以下に整理すれば、第一の特

徴は、楽器工房とその下請の部品工房の連携によって産業が成立している点である。コルカタ市内に隣接したハウラー市やフグリー市にある多くの下請工房は5人以下で構成され、大工のカーストや、革を扱うため、下層のベンガル・イスラム教徒が多いのも特徴である。知識や技術をもった職人の増加を抑制するため、製作技術は外部に口外されず、イスラム居住区での閉鎖的な生産体制が、高度な技術力の継承に一役買って来たと考えられる。

だが一方で、製作時間の短縮やコストといった生産性の観点から見れば、そうした分業体制を貫くことは、効率的とは考え難い。事実、ドウワルキン工房では月々20台前後を製作するが、これは機械化されたデリーの大手工房の月間700台という生産量とはかけ離れ、市場占有率から見ても非常に僅かな数字である。

そして第二の特徴には、リード製造をパリタナに依存している点にある。他都市のようにリード製造を含む完全生産体制にある場合は、各工房単位で生産量の調整が可能であるが、コルカタの場合は、パリタナでのリード生産量に限度がある以上、ハルモニウムの生産台数にも常に上限がある。

最後に

コルカタの工房では、男子の後継者不足や、国外への販路開拓の遅れ、また電子キーボードの流入といった様々な不安要素を抱え、今後の存続を危惧する工房関係者も少なくない。しかしながら、コルカタのハルモニウム産業全体が一種の「共同体」として成立している以上、例え一工房が販路拡大を目指して経営改革を掲げたとしても、実際には生産量を格段に上げる体制にはない。

近年、電子鍵盤楽器が急激に需要拡大するインドでは、2007年には日系企業のヤマハやカシオがインド市場向けの電子キーボードを発表するに至り、そうした状況に対して、「電子キーボードは誰もが簡単に演奏可能なインスタントな楽器」として嫌悪を露にする工房経営者もいる。だが皮肉なことに、歴史的に見れば、インドにおけるハルモニウムの浸透は、鍵盤というインターフェー



図6 リード

ス、即ち、高い視覚的要素を武器に、従来の伴奏楽器であったフレットレスな擦弦楽器よりも習得が容易であったことがその普及の一因であった。裏返せば、鍵盤楽器であるハーモニウムは、当時は「インスタント」な楽器であったと言えなくもない。かつて新旧の楽器をめぐる対立や論争が起こったように、約 100 年の周期で「伝統」の座が塗り替えられて変容していく。

謝 辞

本研究の遂行にあたり、公益財団法人三島海雲記念財

団より学術研究奨励金を賜りましたこと、財団の関係各位に篤く御礼申し上げます。

文 献

- 1) Baruah, U.L. : This is All India Radio: a handbook of radio broadcasting in India., pp.4-8, All India Radio, 1983.
- 2) Sambamoorthy, P. : *Sangeet Natak Akademi Journal.*, 20, pp.5-29, 1971.
- 3) Bakhle, Janaki. : Two men and music: Nationalism in the making of an Indian Classical Tradition., p.88, Oxford University Press, 2005.